

放送記者 相模原殺傷事件受け

息子よ、そのままがいい

相模原市の障害者施設で19人が刺殺された事件を受け、放送記者の神戸金史さん(49)一家が、自閉症の長男と悩みながら生きた軌跡を本にまとめた。「障害を持つ息子へ」(ブックマン社刊)。神戸さん、妻、次男の3人が事件をきっかけに長男の存在の大きさに改めて気づいたとつづっている。【青島頭】

「障害者は生きていい名前が伏せられた被害者の必要がない」。7月、者の様子は伝わってこなかった。RKB毎日述が報道される一方、放送(福岡市)東京報道

障害を持つ息子へ

あなたが生まれたことで、私たち夫婦は悩み考え、それまでとは違う人生を生きてきた。親である私たちでさえ、あなたが生まれなかったら、今の私たちではないのだね。

ああ、息子よ。誰もが、健常で生きることはできない。誰かが、障害を持って生きていかなければならない。

なぜ、今まで気付かなかったのだろう。
(フェイスブックより抜粋)

自閉症の長男との17年 本に

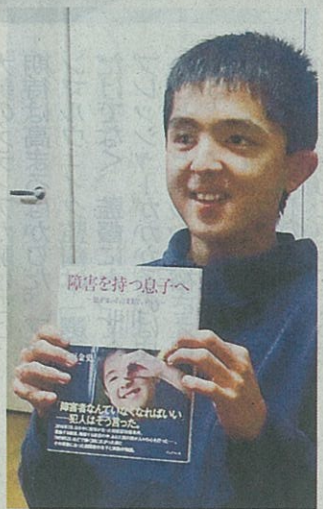


神戸金史さん

部長の神戸さんは自分たちを否定された気がして男の映像が頭から消えなくなり、心が不安定になったという。

「あなたが生まれてきてよかった」。数日後、東京都内に単身赴任中の神戸さんは長男

金史さん(17)への思いをフェイスブックに書き込んだ。「息子よ、そのままがいい」。詩を思わせる記述は反響を呼び、テレビや新聞で紹介された。神戸さんは毎日新聞記者だった2004年、言葉を持たない金史さんとの生活をもとに自閉症について連載



本を手にする神戸金史さん(福岡市で10月下旬、神戸金史さん提供)

「うちの子を書いた。放送局に転じた06年には、自閉症の子を持つ親による無理心中事件の多発を告発し、社会に理解と支援を訴える同名の番組を手がけもした。

それから10年。「詩」を読んだブックマン社の小宮亜里編集長に依頼されて、17年間を本にすることにし、家族も手記を寄せた。高校1年の次男周作さん

(16)は幼い頃「話せてけんかができる普通のお兄ちゃんかほしかった」と思っていたが、小学校4年の時に一緒に習い事に行くことを

楽しく感じて「障害を持っていいようがないまいが、私の兄だ」と受け止めるようになったと明かした。

妻圭子さん(49)は相模原の事件後、病気や障害はないほうがいいという心が自分に潜んでいたことに苦しんだ。それでも幸せそうに暮らす金史さんを見て「思い上がっていた」と率直につづった。

神戸さんは「(次男と妻の)2人の気持ちは知らなかったことばかり。一番大事なことを書いてくれた」。3人の気持ちに詰まった共著を感慨深げに語る。